

# 「縁・えにし」のよろこび

## ～秋季・彼岸会～

先般、9月18日～20日までの3日間、彼岸会の仏縁を賜りました。彼岸入りを前に初日を迎えました。たくさんの方にお参りをいただきました。亡き方々を偲びながら、先立たれた方々が「仏縁に遇っておくれよ」と、阿弥陀さまの大きなお慈悲とともに、この私に寄り添ってくださっているようです。咲き誇る彼岸花に包まれながらの、尊い仏縁でした。



## ～秋の仏教婦人会法座～

秋晴れの中、10月10日に『秋の仏教婦人会法座』をお勤めしました。講師に、木下明水師（熊本県八代市・勝明寺）をお迎えし、南無阿弥陀仏のおこころをお聴聞させていただきました。ご講師は、なんと元・芸人！様々なご経験を通して、笑いあり、涙ありの有り難いお取り次ぎでした。

さすが、仏教婦人会役員の皆さま！  
美味しいお齋に、星3つ☆☆☆！



## ～親鸞聖人・報恩講（753回忌）～

先日、11月19日～21日の3日間、浄土真宗の宗祖・親鸞聖人のご仏事をお勤めいたしました。浄土真宗では、親鸞聖人のご命日（1月16日）を中心に、700年以上続く大切な法要です。阿弥陀さまのお救いを明らかにしてくださった親鸞聖人の偲び、そして、阿弥陀さまに抱かれていった亡き方々も偲び、仏恩とともに、親鸞聖人、亡き方々のご恩をかみしめ、お礼を申させていただきます。法要です。

最終日は、たくさんの僧侶とご門徒とともに、雅楽の音色の中、賑々しくお勤めさせていただきました。



講師：原田 円城師



講師：木下 明水師



講師：藤本 唯信師

## <手を合わせ、お念仏（南無阿弥陀仏）申すということは・・・？>

それは、先立たれていった亡き方々と、悲しい別れで終わったわけではなく、阿弥陀さまのお慈悲に包まれた証拠の中、亡き方にお礼の言える世界であり、別れのない縁が深まる、尊いお育てに遇う姿でありました。

どうぞお参りください。



世話人紹介…今回は王塚台地区です




押川さん(左) 上野さん(右)



榎木園さん

真教寺親鸞聖人 750回大遠忌法要  
寺基400年・住職継職法要  
2016(平成28)年10月29日・30日

 法要まで **668** 日  
(2015年1月1日より)

## 阿弥陀さまからのお手紙

### 『背負われて生かされている私』

佐賀県・善覚寺

正木 隆真

現代は「物に富んで心に病む時代」といわれています。物質的には大変豊かで便利な毎日を送っています。一方、凶悪な犯罪や悲しい事件が後を絶たないのも事実です。何の不自由もなく豊かな生活をさせていたとしても、さまざまな悩みが尽きないのはどうしてでしょうか。表面的な豊かさとは逆に、人々の心はまるで荒廃の一途をたどっているかのようです。人間にとって本当の幸せとは一体何なのでしょう。

私たちはややもすると「自分一人の力で生きていくのだ」と勘違いをしてしまいがちです。また「誰にも迷惑はかけていない」とか「一人に迷惑をかけるな！」などという言葉を時々耳にします。しかし、実際にはさまざまな人のお世話になり、多少の迷惑もかけなければ生きることができないというのが、私自身の事実です。これまでこれからも、あらゆるご恩の中でしか生きることができないのです。

毎日の食事を通して考えても、穀物や動物などのあらゆる命が私の命となって支えていて下さるのです。一分一秒たりとも自分だけの力で生きることが出来なかつたはず。そして「あなたのいのちは我いのち」と、私を悲しいまでに願いつつ、換ひ続けていて下さる仏さまがいっぱいいます。つまり、私という存在は「支えづめに支えられ、願いづめに願われている」という事に気付かせて下さるのが仏さまの智慧であり、その智慧に遇う者は本当に喜ぶべきもの、本当に尊いものを

知らされて、潤いのあるあたたかい生活をさせていただくのです。

これまで私の人生は私自身が背負っていると思ってきましたが、むしろ背負われて生かされているのが私の本当の姿だったのです。この事こそ本当に尊ぶべき事であり、順境の時も、逆境の時も人生を根柢から支えて下さる喜びとなつて下さるのです。

「荷負群生（あなたを背負っているのだよ）」という、命もろとも仏さまに背負われている私だったのです。

### 幼き日の母の姿

私事で恐縮ですが、幼い日の思い出を通して、この事を味あわせていただきたいと思えます。

私の父は、四十二歳という若さで往生いたしました。その父に代わって住職になった母に、女手一つで育てていただきました。思えば幼い頃から父のいない家庭の苦勞を目にするにつけ、子ども心に自分の人生は不幸だと思っておりました。そして、その間幾度となく辛い思いや寂しい思いをいたしました。

今でこそ毎日、車で法務に回らせていただきませんが、当時の母は歩いてご門徒宅を回っていたようで、忙しい日には早朝から夕刻まで丸一日かけて法務を勤めていたようです。その間、私の面倒を見ていてくれたのが三つ年上の姉でした。詳しいことは忘れましたが、何かの理由で私がぐずって泣きやまなかった時のことです。困った姉が、本堂の正面の階段に私を座らせて、背中をさすってくれていたのです。どのくらい二人で座って待っていたでしょう。やっと母が帰ってきました。そのとき母は、二人の姿を見るやいなや、涙を

拭いながら「ごめんね、寂しい思いをさせて・・・。」と二人のもとへかけよってくれました。

今になって改めて思い出すと、親とは何と尊い存在であったかと、頭の下がる思いがいたします。ここに、頼まれもせず、お礼も言わないのに、我が子を背負わずにはおられないという、親の姿がありました。自分一人が味わっていると思っていた寂しさや辛さ、それをすべて含めて背負うて下さる世界があったことに気づかせていただくとき、このことを通して阿弥陀さまのお慈悲を慶ばすにはおられないのです。

### 私も仏とは成るまい

阿弥陀さまは「自他一如（あなたの中の私は我がいのち）」「衆生苦惱我苦惱（あなたの苦しみは我が苦しみ）」のお心をもって、迷い通しの私を見捨てることができず、「我にまかせよ必ず救う」というご本願をお建て下さいました。しかも、「もし救うことができなかつたら、私も 覚りの仏とは成るまい」と、自身の覚りを賭けて、お誓い下さっているのです。

「救つてやるぞ」ではなく「お願いだから救わせてくれよ」という悲しいまでの換ひ声が、南無阿弥陀仏のお名号なのです。

今まさに、阿弥陀さまに背負われ、あらゆるいのちに支えられている我が身を慶ばせていただくより他に、本当の幸せはあり得ないことを味あわせていただくのです。

※この法話を書かれた正木隆真師は来年の永代経法要(2015年)4月23日(25日)のご講師です。  
『本願寺新報2001年11月1日号より』